

## 2018年度 TOEIC スコアと授業アンケートの関係

菊池 武<sup>\*1</sup>・小西 康文<sup>\*2</sup>・小林 邦彦<sup>\*1</sup>・\*上田 敦子<sup>\*3</sup>・大森 真<sup>\*3</sup>・  
館 深雪<sup>\*3</sup>・大山 廉<sup>\*3</sup>・大津 理香<sup>\*3</sup>・鈴木 聡子<sup>\*3</sup>  
(2019年10月28日 受理)

## Analyzing the Relationship between 2018 TOEIC Test Score and Classroom Questionnaire

Takeshi KIKUCHI<sup>\*1</sup>, Yasufumi KONISHI<sup>\*2</sup>, Kunihiro KOBAYASHI<sup>\*1</sup>, Atsuko UEDA<sup>\*3</sup>, Makoto OMORI<sup>\*3</sup>,  
Miyuki TATE<sup>\*3</sup>, Ren OYAMA<sup>\*3</sup>, Rika OHTSU<sup>\*3</sup>, and Satoko SUZUKI<sup>\*3</sup>  
(Received October 28, 2019)

### Abstract

This paper attempts to explore the relationships between students' TOEIC scores and the results of the classroom questionnaire conducted at the end of the school term. The items of the questionnaire were divided into three categories: the quality of the class, students' attitude toward the class, and the sense of achievement on the part of the students. The relationships between each item and the TOEIC score were analyzed, and it was shown that there were some close relationships between the items. It implies that although using TOEIC test results merely for the purpose of measuring effectiveness of an English curriculum can be sometimes harmful, they can be utilized effectively if they are combined with other measures such as a classroom questionnaire in order to help teachers improve the quality of their daily practice, which, in the long run, can improve their students' proficiency of English as well as their TOEIC score.

キーワード：TOEIC、授業アンケート、授業実践、授業参加、動機づけ、英語運用能力

### 1. はじめに

近年の急速なグローバル化にともなう社会的な要請により TOEIC を何らかの形で英語カリキュラムの中に組み込む大学は少なくない。そのような中、その活用の方法によっては、教育効果の点

<sup>1</sup>執筆、<sup>2</sup>データ分析、執筆、<sup>3</sup>データの収集、提供、校閲等を担当した。

\*茨城大学全学教育機構(〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

で懸念される考え方も示されている（大津 2009、大津他 2013、江利川他 2014）。茨城大学においても、共通教育科目の中で TOEIC が成績に加味される形で導入され、その是非については、しばしば授業担当者の間では様々な観点から議論の対象となっている。例えば、授業において TOEIC に関わる内容を必ずしも行っていないので、英語の授業そのものが TOEIC の得点に関係しないといった考え方などはその典型的な例であろう。そのような状況を踏まえ、本稿においては、TOEIC を大学の英語カリキュラムの中で活用する意義を論考する一つの試みとして、本学の学生の TOEIC の得点と、大学において全授業を対象として行われる担当教員の授業アンケートの結果との間にどのような関係があるのか確認したうえで、考察を行い、結論を導くとともに、教育的示唆について言及する。なお、本稿においては、大学教育に限定されず、広い意味で用いることを意図し、もともと使用されている場合を除き、「学習」という表現を使用する。

## 2. 研究の背景

### 2-1 プログラム改編と TOEIC の活用

茨城大学において入学者に対して行われる英語教育は、学内の共通教育を担う組織である全学教育機構に属するプラクティカル・イングリッシュ部会がカリキュラム編成、プログラム運営を行っている。2017 年度にカリキュラム改編が行われ、それまでの「総合英語」から「プラクティカル・イングリッシュ」へと変更され、科目内容、単位数、シラバス等にも大幅な変更が加えられた。一方、習熟度ごとにクラス編成を行うことは「総合英語」と同様に継承され、1 年次の必修科目である「Integrated English」(以下、IE とする)においては、3 つのレベルに分けられ習熟度の低い順にそれぞれ、前学期には IA、IIA、IIIA、後学期（前学期とクラスは共通）には IB、IIB、IIIB を履修するカリキュラム編成をとっている。「プラクティカル・イングリッシュ」では、英語の「読む・書く・聞く・話す」の 4 技能を統合して伸ばす指導を、ヨーロッパ言語参照枠 (CEFR) を参考として到達目標を設定した共通シラバスを作成した上で行っている。IE は 1 年次の学生を対象としたプログラムにおいても中核となる科目である。各クラスにおいて共通の内容は以下の点である。

- シラバス（使用教科書、評価基準、小テストを含む）
- 自律的学習に関する内容として、課題提出用のフォーマット・基準となる量・時間・内容（ただし、多読等、個別の教材については課題の性質上ある程度学生の選択の余地がある。）

その一方で、各教員の裁量による部分は以下の内容となる。

- 授業における補助資料・教材
- 活動形態を含む授業の進め方

そして、12 月に TOEIC を受験することがカリキュラムに組み込まれ、IB、IIB、IIIB の成績に反映されるとともに、次年度のクラス編成の資料として活用されることとなっている。前身である「総合英語」のプログラム実施時にも TOEIC に関連する研究は行われており（小林他 2016）、授業の質の改善に資する試みを継続してきたが、今回は新たな試みとして、TOEIC の結果と後学期の終盤に授業時間を用いて各クラスで授業アンケート結果との関連を分析することとした。

## 2-2 TOEIC スコア

今回分析に用いた TOEIC スコアは 2018 年 12 月に実施されたものである。以下にその結果の概要を示す。

表 1 TOEIC 一斉テストの記述統計

水準	人数	平均値	標準偏差	中央値	最大値	最小値
IE IB	140	345.79	74.69	342.5	600	165
IE IIB	1266	440.48	101.09	435.0	795	185
IE IIIB	139	604.21	143.74	580.0	990	205
全体	1545	446.63	117.94	435.0	990	165

表 1 が示すように、受験者の多くは IE IIB に属し、学内においてプログラム全体への影響も大きいことを踏まえて、今回の分析においては IE IIB のみを対象とすることとした。この IE IIB の各クラスは工学部の学生からなるクラス、教育学部の学生と農学部からなるクラス、人文社会科学部と理学部からなるクラスに分けられるが、それ以外の属性はランダムに 30 人前後の人数で割り当てられている。各クラスの TOEIC スコアの平均値の分布は次の図 1 のように正規分布となる。

## 2-3 授業アンケート

本学では各学期の終わりに授業の質の向上に資することを目的として、授業アンケートを実施している。実施にあたっては、ウェブ上で行うこととなっており、授業内においてスマートフォンを用いて行うことも可能であり、また、授業外に行うことも可能である。アンケートの結果については、共通シラバスによる本プログラムの場合、各授業担当教員のみならず、そのプログラムの運営責任者には全体の集計結果が共有される。それらの集計結果についてプログラム担当部会としても授業の質向上のための FD を行い、報告することが義務付けられている。この一連のサイクルにより授業の質の向上の試みが行われている。

今回のアンケート結果を使用するにあたり、調査対象のクラスは、IE IIB のクラスのうち、TOEIC 受験率が 95%以上、アンケートの回答率が 70%以上（回収率にばらつきがみられるのは、前述のような実施の方法が原因とも考えられる。）の全 16 クラスとした。実際に行われたアンケート項目の中で、本稿では関連が深いと考えられる以下の 10 の質問項目を取り上げて解析を行う。Q の後の数字はもともとのアンケートの数字を示し、表示を変えることも可能ではあるが、便宜上そのまま用いる。

- Q4: この授業を受けて、新しいものの見方や知識・技能を獲得した実感がありますか？
- Q6: 教員の授業資料（プリント・板書・スライドなど）の提示や模範は適切でしたか？
- Q7: この授業にあなたは、積極的に取り組みましたか？
- Q8: この授業の難易度はどの程度でしたか？
- Q9: この授業で行った活動は英語力を伸ばすのに有効でしたか？
- Q10: 自律的学習の課題(CALL、Book/Reading Report 等)により、自ら学習する習慣が身につきましたか？

- Q11: この授業は学生の興味・関心を高めて授業への積極的な参加や自発的な学修を促すように工夫されていませんか？
- Q12: 全体を通して、1回の授業についてどの程度予習・復習\*をしましたか？  
\*自宅や大学で行う試験勉強やレポートの作成時間だけでなく、授業に関連して書籍やネットを利用した事前の準備時間、大学以外の場所で授業に関連して自主的に行った学習時間を含みます。
- Q13: この授業の内容を理解できましたか？
- Q15: この授業に全体として満足しましたか？

### 3. 分析の方法

分析にあたっては、前述のアンケート項目の10の質問に対する5択の回答項目に対して質問内容に応じて、以下のように数値化する。

Q4、Q6、Q7、Q9、Q10に対する回答項目は「はい」と「いいえ」とその中間部分を表す5択となっているため、「はい」を1、「いいえ」を0、この中間値として「はい」から「いいえ」へ向かって0.75、0.5、0.25と数値化する。

Q8に対する回答項目は「易しかった」、「やや易しかった」、「ちょうどよい」、「やや難しかった」、「難しかった」となっているため、「易しかった」を1、「やや易しかった」を0.75、「ちょうどよい」を0.5、「やや難しかった」を0.25、「難しかった」を0とする。

Q11に対する回答項目は「とてもよく工夫されていた」、「よく工夫されていた」、「どちらともいえない」、「あまり工夫されていなかった」、「まったく工夫されていなかった」となっているため、「とてもよく工夫されていた」を1、「よく工夫されていた」を0.75、「どちらともいえない」を0.5、「あまり工夫されていなかった」を0.25、「まったく工夫されていなかった」を0とする。

Q12に対する回答項目は「3時間以上」、「2時間以上」、「1時間以上」、「30分以上1時間未満」、「0～30分未満」と5択となっているため、「3時間以上」を1、「2時間以上」を0.75、「1時間以上」を0.5、「30分以上1時間未満」を0.25、「0～30分未満」を0とする。

Q13に対する回答項目は「とてもよく理解できた」、「概ね理解できた」、「どちらともいえない」、「あまり理解できなかった」、「全く理解できなかった」となっているため、「とてもよく理解できた」を1、「概ね理解できた」を0.75、「どちらともいえない」を0.5、「あまり理解できなかった」を0.25、「全く理解できなかった」を0とする。

Q15に対する回答項目は「十分に満足」、「概ね満足」、「どちらともいえない」、「やや不満」、「かなり不満」となっているため、「十分に満足」を1、「概ね満足」を0.75、「どちらともいえない」を0.5、「やや不満」を0.25、「かなり不満」を0とする。

こうした尺度のもと、クラスごとの各設問項目に対する回答の平均値とTOEICスコアの平均値の関係を分析する。以下では、このクラスごとの各設問項目に対する回答の平均値を平均得点、クラスごとのTOEICスコアの平均値をTOEIC平均スコアとよぶ。総数16クラスのTOEIC平均スコアと各設問項目の平均得点の分布は次のようになる(図1、2参照)。

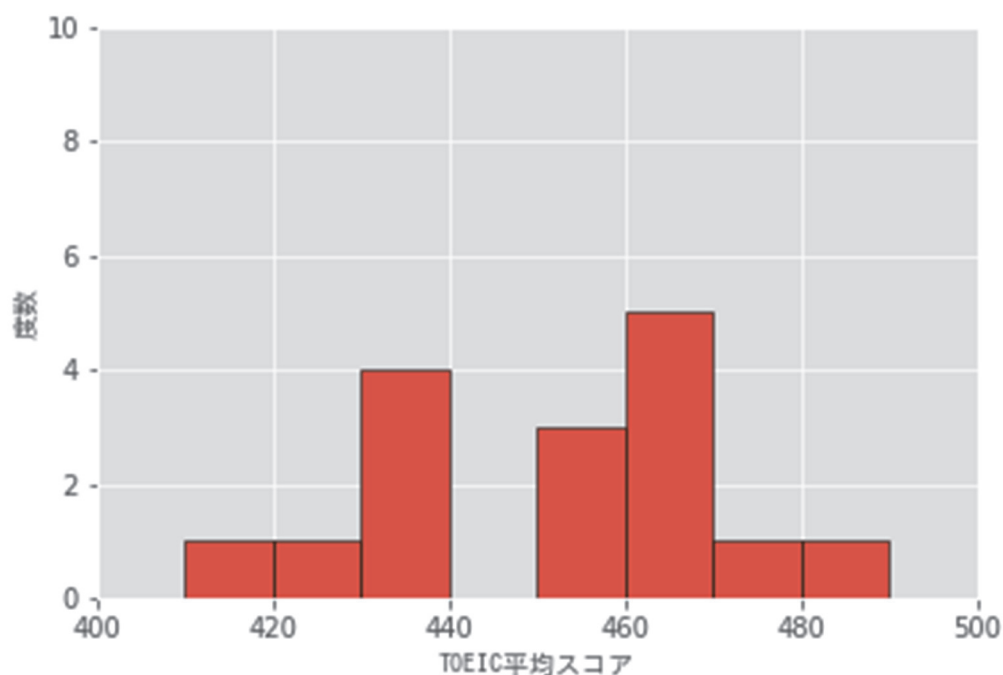


図1：各クラスの TOEIC 平均スコアの分布を示したヒストグラム

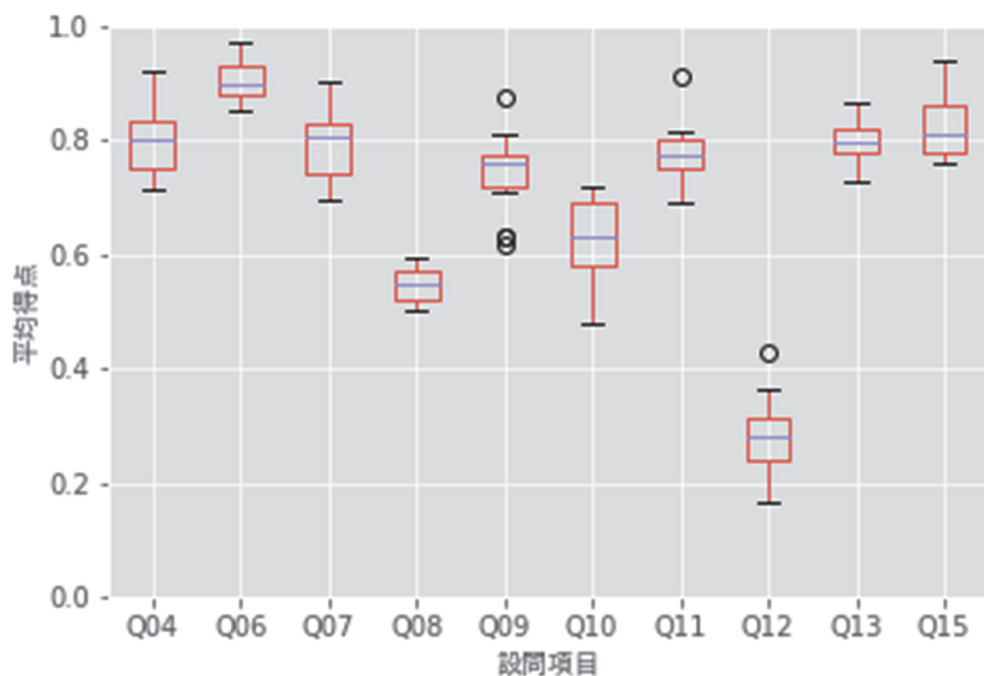


図2：クラスごとの各設問項目に対する平均得点の分布を示したボックスプロット

ここでは 10 の設問項目を、「教員が行う授業の質を問う項目」として Q6、Q8、Q11、「授業を受ける学生の姿勢を問う項目」として Q7、Q10、Q12、そして「授業を受けた学生の学習結果」を問

う項目として Q4、Q9、Q13、Q15 を選び、3つのグループに分類して考察する。この時、これら3つのグループに対して、前者の2グループである「教員が行う授業の質を問う項目」と「授業を受ける学生の姿勢を問う項目」が、最後の「授業を受けた学生の学習結果」に影響を及ぼすと考えられる。これらの各設問項目の平均得点に TOEIC 平均スコアを加えた項目間の相関係数は表2のようになる。

表2 TOEIC 平均スコアおよび各質問項目の平均得点との間の相関係数  
( $p<0.10$  \*,  $p<0.05$  \*\*,  $p<0.01$  \*\*\*)

	スコア	Q04	Q06	Q07	Q08	Q09	Q10	Q11	Q12	Q13	Q15
スコア	1.00										
Q04	0.55 **	1.00									
Q06	0.38 **	0.51	1.00								
Q07	0.28 **	0.59	0.43	1.00							
Q08	-0.08	-0.33	-0.21	0.13	1.00						
Q09	0.67 ***	0.72 ***	0.34	0.44 *	-0.37	1.00					
Q10	0.11	0.32	-0.18	0.63 ***	0.11	0.47 *	1.00				
Q11	0.50 **	0.80 ***	0.69 ***	0.69 ***	-0.18	0.64 ***	0.39	1.00			
Q12	0.23	0.21	-0.19	0.14	-0.30	0.51 **	0.62 **	0.30	1.00		
Q13	0.46 *	0.60 **	0.62 **	0.83 ***	0.17	0.44 *	0.31	0.76 ***	0.03	1.00	
Q15	0.50 **	0.72 ***	0.63 ***	0.66 ***	-0.10	0.49 *	0.38	0.78 ***	0.24	0.74 ***	1.00

以下においては、それぞれの項目ごとに分析を行う。

#### 4. 分析結果および考察

##### 4-1 教員が行う授業の質

はじめに、各クラスの教員が行う授業の質を問う項目 Q6、Q8、Q11 に対する平均得点と TOEIC 平均スコアおよび他の項目の平均得点との間の相関関係を分析する (図3参照)。

授業の難易度を問う Q8 の平均得点に対する相関関係をみると、有意水準 0.10 の両側検定で有意になる相関係数は存在しなかった。この結果に対しては、アンケート結果の値が「ちょうどよい」を指す 0.5~06 の間に全て分布し 2 次関数の回帰曲線の極値に対応する結果だと考えられる。ばらつきが小さいことは、難易度が調整されている統一授業が上手く機能している結果ともとらえることができる。つまり、現時点での授業の難易度は受講生にとって、適切であると受け止められていると解すことができ、習熟度別クラス編成とそれに応じた教材等の難易度設定が適切であると解釈できる。

教員の授業資料や模範の適切さを問う Q6 の平均得点に対する相関関係をみると、有意水準 0.05 の両側検定で有意となるのは、授業を受けた学生の学習結果を問う 4 つの項目のうち Q9 をのぞく Q04、Q13、Q15 の平均得点と Q6 の平均得点の間の相関係数であった。この結果より、教員による適切な授業資料や模範は、TOEIC 平均スコアや授業内活動での英語力向上の有効性には直接関係ないが、授業への満足度を決める要因となっていると考えられる。

授業への参加や自発的な学習を促すように工夫された授業であるかどうかを問う Q11 の平均得点に対する相関関係をみると、有意水準 0.05 の両側検定で有意となるのは、Q8、Q10、Q12 以外の各項目の平均得点と Q11 の平均得点の間の相関係数であった。つまり、このことが、TOEIC スコアの向上や英語力の伸びを含む学生の学習結果の全てに関連する非常に重要な要因となっていると考えられる。この結果を踏まえると、授業への参加や自発的な学習を促すことができれば TOEIC の結果のみならず、英語の運用能力向上全般に寄与すると考えることができ、これは当然の結果ととらえることも可能であろうが、この要因の大きさがデータを通して示されていることは一定の意義を持つものと考えられる。

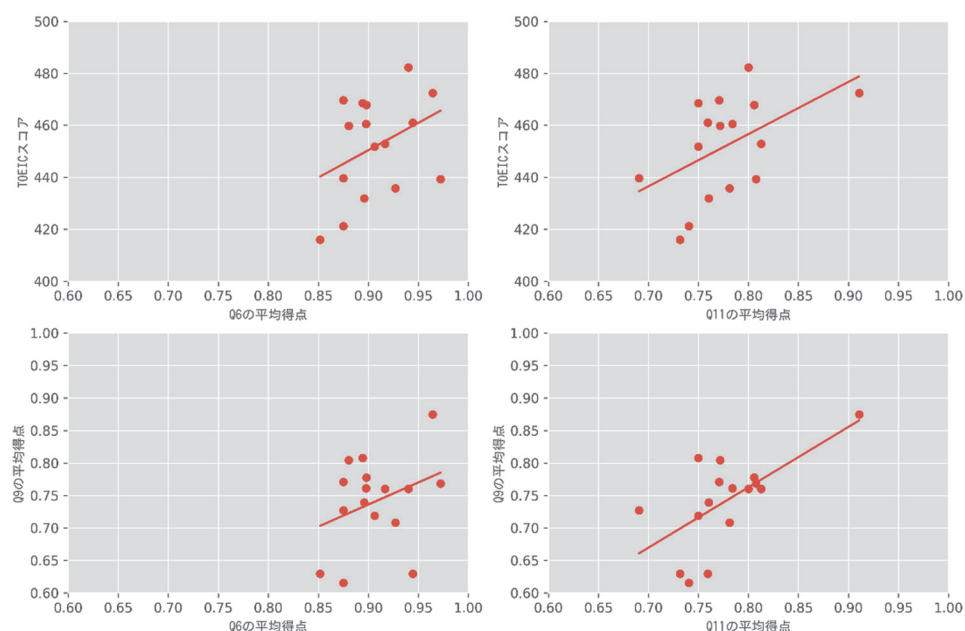


図3：教員が行う授業の質を問う項目 Q6、Q11 と TOEIC 平均スコアおよび授業内活動での英語力向上の有効性を問う Q9 との間の相関関係

#### 4-2 授業を受ける学生の姿勢

次に、授業を受ける学生の姿勢を問う項目 Q7、Q10、Q12 に対する平均得点と TOEIC 平均スコアおよび他の項目に対する平均得点との相関関係を分析する(図 4 参照)。授業を受ける学生の姿勢を問うこの 3 つの各項目の平均得点と TOEIC 平均スコアとの相関係数は、有意水準 0.10 の両側検定で有意にならなかった。しかしながら、この 3 つの各項目と授業内活動での英語力向上の有効性を問う Q9 の平均得点との間の相関係数は有意水準 0.10 の両側検定で有意になった。このことから、TOEIC では測ることのできない英語力が伸びている等の可能性が考えられる。つまり、IE の科目においては、英語の 4 技能を伸ばすことを目的としており、テストで直接測定されていないスピーキングやライティングの力が授業を受けたことにより、向上している可能性がある。また、今回の TOEIC では結果が伴わなかったものの、長期的には TOEIC スコアの向上につながる可能性も考えられる。

さらにこの 3 つの各項目別に相関関係について分析する。まず、授業への積極的な参加を問う Q7 の平均得点と、授業を受けた学生の学習結果を問う 3 つの項目 Q4、Q13、Q15 の各平均得点、授業への参加や自発的な学修を促すように工夫された授業であるかどうかを問う Q11 の平均得点、自ら学習する習慣がついたかどうかを問う Q10 の平均得点の間の各相関係数は有意水準 0.05 の両側検定で有意となった。つまり、授業への参加や自発的な学習を促すように工夫された授業により、積極的に授業に参加した学生が多いクラスは、その授業に対する学習結果のみならず、自ら学習する習慣にも好ましい影響を与えていることがわかる。さらに、Q10 の平均得点と学習時間を問う Q12 の平均得点の間の相関係数は有意水準 0.05 の両側検定で有意となり、自ら学習する習慣が身についた学生が多いクラスは、学習時間も長いという自然な結果が得られている。このような結果は、自律的な学習者育成の観点からも授業への参加や自発的な学習を促す試みが重要な役割を果たしていることを示していると言える。英語が外国語として使用されている日本の環境において、学習時間の確保により英語との接点をできる限り多く持つことは運用能力の向上のためにとりわけ重要であるが、授業内の工夫が好ましい影響を及ぼしうることは意義深いと言えるだろう。



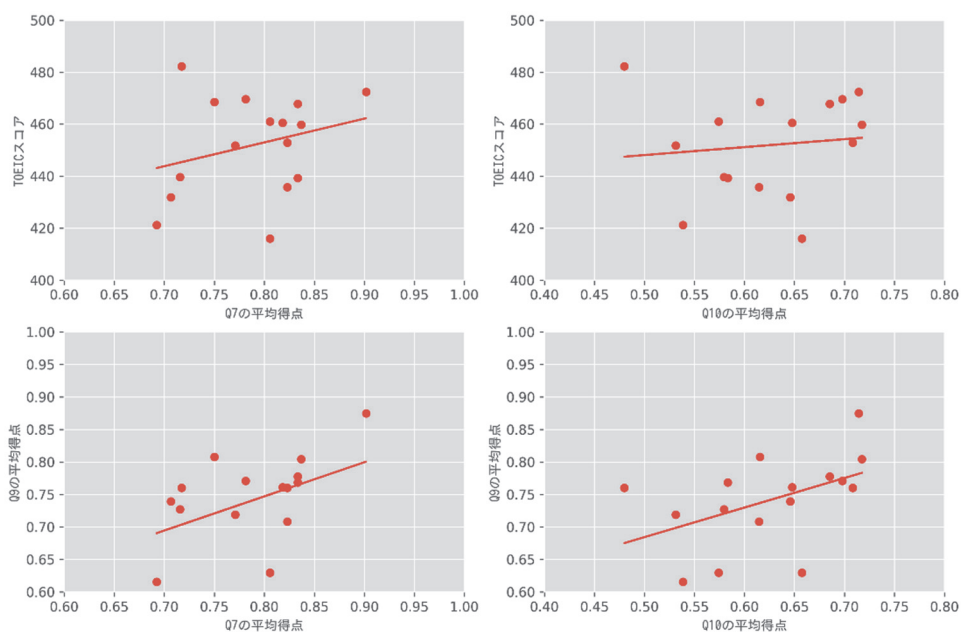


図 4：授業を受ける学生の姿勢を問う項目 Q7、Q10 と TOEIC 平均スコアおよび授業内活動での英語力向上の有効性を問う Q9 との間の相関関係

#### 4-3 授業を受けた学生の学習結果

最後に、授業を受けた学生の学習結果を問う項目 Q04、Q9、Q13、Q15 に対する平均得点と TOEIC 平均スコアとの相関関係について分析する(図 5 参照)。この 4 つの各項目と TOEIC 平均スコアとの間の相関係数は有意水準 0.10 の両側検定で有意となった。それゆえ、各クラスの授業の良し悪しが TOEIC 平均スコアに影響すると考えることは可能である。しかしながら、TOEIC の受験日やスコアの開示日はアンケートの回答日より若干早いため、その因果関係に関して不透明な要素(例えば、TOEIC スコアの結果が、授業アンケートの結果に影響する可能性も排除できない。)もあり、今回の分析では授業を受けた学生の学習結果を問う項目の一つとして TOEIC 平均スコアを考えることが妥当であると言えるであろう。その中の一つである授業内活動での英語力向上の有効性 Q9 の平均得点と TOEIC 平均スコアの間には相関係数 0.67( $p < 0.01$ )の強い相関があり、同じ英語力を表す指標になっている。しかしながら、TOEIC 平均スコアとの相関がない授業を受ける学生の姿勢を問う各項目 Q7、Q10、Q12 と Q9 の平均得点の間には相関関係 0.44 以上の相関があるため質的な違いも見受けられる。

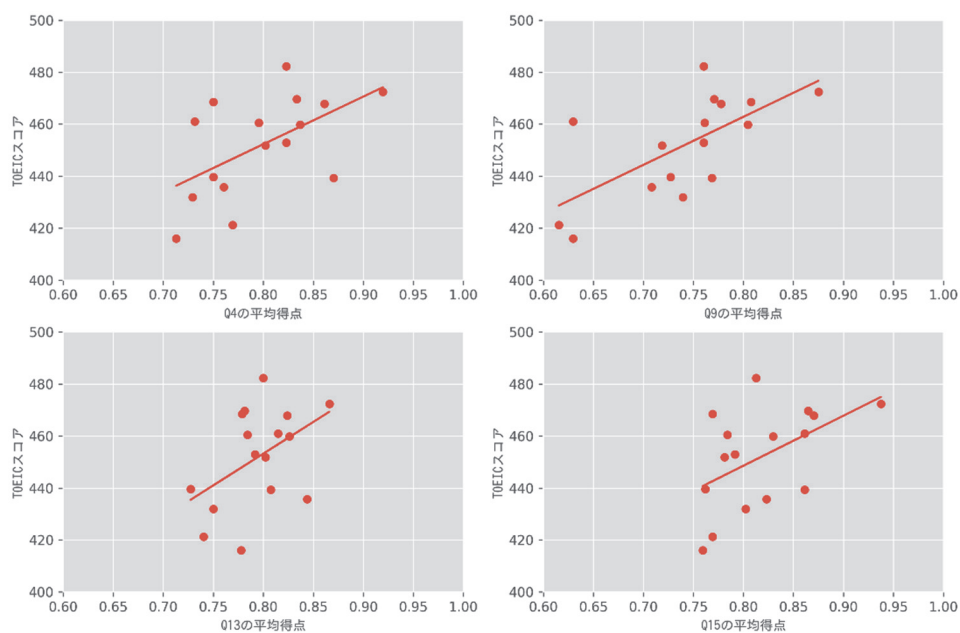


図5：授業を受けた学生の学習結果を問う項目 Q4、Q9、Q13、Q15 と TOEIC 平均スコアとの間の相関関係

## 5. 結論および教育的示唆

10 個のアンケート項目を教員が行う授業の質を問う項目は Q6、Q8、Q11、授業を受ける学生の姿勢を問う項目は Q7、Q10、Q12、そして授業を受けた学生の学習結果を問う項目は Q04、Q9、Q13、Q15 と 3 つに分けた時、授業を受けた学生の学習結果を問う各項目の平均値は各クラスの TOEIC スコアの平均値と相関係数 0.46 以上( $p < 0.10$ )の相関があった。教員が行う授業の質を問う項目に関しては、Q8 は統一授業の質保証を表し、Q6 は授業の満足度に、Q11 は授業の満足度から TOEIC スコアまで様々な項目と関係している。したがって、Q11 や Q6 についてクラス平均値が上がるように授業改善すること、すなわち興味関心を高めるための授業資料と示範を工夫し学生を積極的に授業へ参加させるような授業を展開すれば、授業評価の向上と共に 4 技能の英語力および TOEIC スコアの上昇に寄与すると考えられる。従って、例えば高いデータ数値を示す教員による授業での実践報告を FD 等によりプログラムの授業担当者間で共有することにより、たとえその実践方法が個々の教員の多様な指向性により直ちに実践導入に結びつかないまでも、授業の質の向上に何らかの形で寄与することは確かであろうし、やがてはそれが大学全体としての学生の英語力向上に資することも可能であろう。冒頭で指摘した TOEIC を大学教育の中で単なる評価の指標として活用する危険性については十分に認識する必要があるであろうが、そのような認識を踏まえた上で、今回のような分析を通し、積極的に TOEIC の結果を活用していく方法を模索していくことも同様に必要なことと考えることができるであろう。

#### 引用参考文献

- 大津由紀雄編. (2009). 「危機に立つ日本の英語教育」慶應義塾大学出版会.
- 大津由紀雄・江利川春雄・斉藤兆史・鳥飼玖美子. (2013). 「英語教育、迫りくる破綻」ひつじ書房.
- 江利川春雄・斉藤兆史・鳥飼玖美子・大津由紀雄. (2014). 「学校英語教育は何のため？」ひつじ書房.
- 小林邦彦・小西康文・福田浩子・佐々木友美・上田敦子・大森真・館深雪・野村幸代・藤井拓哉. (2016). 「TOEIC テストスコアとアンケート分析による茨城大学総合英語プログラム改善のための因子分析」『茨城大学大学教育センター紀要』6号, 11-21.